

ペスタロッチにおける人間學的思想の發展

文學士 松田義哲

一

ペスタロッチの思惟においては常に人間學的問題が中心的位置を保つてゐる。語を換へて言へば個々の問題は一つの根本問題即ち人間の本質の探究といふことに歸してゐる。すべての社會學的・教育學的若しくは心理學的思惟も畢竟この根本問題に志向しつゝ進められてゐる。従つてゲーザーが「彼は決して存在一般に對して獨立的な興味を有つてゐたのではなくて彼の興味は専ら人間存在にのみ向けられた」と言つてゐるのは十分正しい。彼は實に人間の本質の發展に對して決してその思索に倦意を覺えたことのない驚嘆すべき洞察力を具へてゐた。彼はこの天才的洞察力と人間に對する、特に成長し行く人間に對する深き關心とによつて彼に課された問題を常に哲學的に認識した。かういふ意味で彼の全思想は一箇の偉大なる人間學であると言ひ得るであらう。それは恰

もカントの哲學が繼じて人間の哲學であり人間學であるのと同様である。

併しここに注意すべきことは彼れの人間學的思想には明らかに推移乃至發展が見られるといふことである。シニタンツの事業と共に方法の完成に至る新しい思想運動が起るのであるが、われわれは彼の精神的活動において二つの時期を區別し、シニタンツ以來初めて彼は狭い意味での教育者になつたのであつて、それ以前はむしろ文化哲學者であつたと考へるのが至當である。しかし勿論この二つの時期は決して判然と區別さるべきものではなくて、既に初期においても彼の所謂方法への關心は明らかに示されてをり、また後期においても一般文化哲學的基礎工作と彼の教育事業の究極的な文化的關係乃至目的とを決して眼中から失ひはしなかつたのである。彼の方法といふも畢竟彼の文化哲學の基礎の上に建てられた

建築物にも比せらるべきものであつて、彼の方法と文化哲學との兩者は本質的には相異つた二つのものではない。従つて彼の方法は、これを文化哲學との内面的關聯において把握するのでなければ十分の理解は難いであらう。

右の如き内面的關聯の存するにも拘らず、一應彼の生涯を二つに大別して前期を文化哲學の時期、後期を方法の時期と呼ぶことが出来るのであるが、更にわれわれは彼の文化哲學において四つの發展段階を、彼の方法において二つの發展段階を、従つて彼れの全思想發展史を通じて六つの發展段階を考へることが出来ると思ふ。然らばその六つの發展段階とは何か。われわれは各々の段階を特色づける微標を指示しつつ彼が人間學的思想の發展の跡を追つて行くことにしよう。

二

さてその第一段階を特色づけるころのものは、既に彼の青年時代を支配したところの情熱的な理想主義である。それはペスタロツチが青年のころ屬してゐたチューリヒの愛國者團を支配してゐたルソー的思想である。彼が未だチューリヒの大學に在學してゐたころ、彼に偉大なる感化を與へた教授が三人ゐた。即ちチンメルマン (Zimmerman)、ブライテンガー (Breitinger) 及びボー

ペスタロツチにおける人間學的思想の發展

ドマー (Todmer) の三人であるが、これらの人々のうちペスタロツチを最も強く動かしたところのものは就中ボードマーである。彼は一千七百三十年以來半世紀に亘つて歴史と政治とを教へた。彼はまた新しい文學の傑作をも學生に教へた。祖國の歴史や憲法學や法律學についての講義では彼は自由及び正義の友として何時も腹藏なく語つた。彼は單に教室における教授を通してのみならず、比較的年長の學生達と或ひは散歩において或ひは自宅において共に親しく語つた。この一種の教育的教授は次第に有機的組織をとるに至り、そのころの政治運動に刺戟せられて遂に一つの結社をなすに至つた。これが所謂「愛國者團」の名を以て呼ばれたころのものであつた。しかもこの愛國者團を支配してゐたものは當時の青年達にとつて一箇の理想像とも言ふべきルソーの思想であつた。ペスタロツチも亦若き友人達と共にルソーに歸依したのであるが、その直接の指導者は言ふまでもなくボードマーであつた。ボードマーの感化が如何に偉大であつたかについてペスタロツチは後年次の如く述懐してゐる。「私にとつてはボードマーの言ふことは私の最内부를灼熱させずには措かなかつた。それは私自身のうちに生きてゐるすべての夢やそして好意的であり絶滅し得

ない善を情熱を以てなし確立しようと努力する私の心情やに結びついた」と。

ペスタロツチに生賦の、そしてポードマーによつて豈かにはぐくみ育てられた理想主義的感情は、他人を救済せんとする熱烈なる欲求と結びついて、ペスタロツチをして市民的世界にたたく立脚せしめなかつた。人間は本来善であるが、現實的社會は惡である。これが當時の彼が懷いた確信であつた。彼はこの社會惡と鬭争することを己が使命と感じ、その社會惡が何であるかについては反省を加へようとはしなかつた。要するにそれは文化批判の觀點であるが、しかし單にこれだけでは未だルソンの半分しか把握されてゐないことは論ずるまでもない。従つてこの時期のペスタロツチの思想は未だ未熟の域を脱してゐないと評し得るであらう。この若き時代の理想主義は現實の試練を受けることにより徐々に天空の高きより地上にひきおろされて、後年のペスタロツチにおいてはよほど現實的色彩の濃厚な理想主義へと變つて行つたのであるが、それでも尙ほ若きころの夢は容易に消えやらず、彼は生涯を通じて半分は現實的なものの中に住み、他の半分は現實から離れた理想の中に生きてゐた。彼れの教育的事業が屢々悲惨な失敗を重ねなくてはなら

なかつた主な原因はここにある。

三

彼は理想實現の第一歩としてノイホーフにおいて農業に従事した。彼がその所有地からあがる利益によつて國民の教養と國民經濟とを向上させようとする更に高き意圖を懷いてゐたことは彼が一千七百七十一年ヒルチェルに宛てた手紙によつても明らかである。しかし種々の理由で——最大の理由はペスタロツチ自身に細かい實際的知識が缺けてゐたことにあるのであるが——折角始めた事業も遂に失敗に終らなければならなかつた。ノイホーフの最初の事業たる農業が失敗に歸したのちペスタロツチは初めて自己の使命が教育に存することを自覺した。斯くて一千七百七十四年の冬貧民學校の事業が始められ、最初は二十人にも足りなかつた兒童がやがて三十余人に増加し、のちには八十人を數へたこともあつた。しかしこの教育的計畫も亦やがて失敗に終り、今や彼は沈淪せる生活のどん底に立たざるを得なかつた。

右に述べた如くペスタロツチの諸計畫は結局失敗に歸したけれども、しかし人間は教育によつて高め向上させ得るといふ彼の根本信念は毫も動搖することはなかつた。否な前後五箇年に亘るノイホーフの實驗は、その失

敗にも拘らず却つて人間の本质についての彼の根本信念を益々強固なものとした。今やその失敗のために思想を實行に移す手段をすべて失つた彼は筆によつて自己の信念を世に發表しようと考えた。斯くして生れたものが「隠者の夕暮」である。従つてこの著作はペスタロッチにおける人間學的思想の發展を知る上に最も意義深きものなのである。

彼はこの著作の劈頭において次の如く問題を提出してゐる。「王座の上になつても藪屋の蔭に住まつても同じ人間、その本质における人間、そも彼は何であるか」と。彼が與へる解答は彼自身が自己の運命において、また他人を助けようとする努力において體驗した二つの大きな對立を相互に結合しようとする。即ち人間は彼の本质の最内部において彼の「眞理」を有つてゐる——これは深い感情であり理想的信仰である。しかしこの眞理は境遇の眞理即ち「生活の立脚地」と調和せしめられなくてはならない。これが「自然」である。従つて「自然」は人間の内部に所與として横たはるる本质であり、靜平と單純とのうちに感得される全人間存在の調和である。斯かる「自然」を人は神とも呼び得るであらう。「神は人類に最も近き關係にある」とはペスタロッチの根本確信である

ペスタロッチにおける人間學的思想の發展

が、ここに「最も近き關係」とは感性的乃至自然的の近さを意味するのではなくて、内面的・精神的關係においての近さをいふのである。「神に對する信仰よ、汝は人類の本质のうちに埋藏されてゐる。善惡に對する感じと同じく、また正不正に對する消し難い感情と同じやうに汝は人間陶冶の基礎としてわれわれの本性の内部に不變的に確乎として横たはつてゐる。」人間よ、汝自身を信ぜよ。汝の本质の内面的感覺を信ぜよ。さうすれば汝は神と不死とを信するであらう。此等の言葉にも窺へる如く彼の意味する神は人間を超越したところの存在ではなくて、寧ろ人間の最内部に見出される本质なのである。従つて彼においては神はまた「自然」でなければならぬ。「人間の藪屋において神が父親としてましますこと——私の本质の最内部における神——神——その贈物と私の生活の悦樂との贈與者、これこそ人類をこの信仰に向つて陶冶することである。これこそあらゆる信仰を悦樂と經驗との上に築く自然の力である。」従つてデレカートも言ふやうに「ペスタロッチにおいて『自然』について妥當するところのものは根本的にはカントの『理性』(Vernunft)フイヒテの『絶對自我』(Absolutes Ich)ヘーゲルの『絶對精神』(absoluter Geist)にも同

様に妥當する」と考へられるのである。以上が彼の思想發展の第二段階である。

四

「隠者の夕暮」には一面において極めて激烈なる口調を帯びた箇所もあるが、これを全體として觀るとき、若き頃ただ一筋の單純なる理想主義に生きたベスタロッチの激烈なる生命が初めて宗教的靜平の世界に入つた趣を示してゐる。そこには人間の醜き現實は描かれてゐない。しかしやがて自然概念の夢を除くことによつて覺醒が訪れた。彼は人間の現實的事實を看過することを欲しなかつた。斯くて今や彼は「隠者の夕暮」において提出した人間の本質の問題を全く他の側面から考察する。彼が創造的・活動的である限り——それを彼はただ愛によつてのみ爲し得たが——彼の思惟もまた樂觀的であつた。然るに一度び不活動的になるや彼の思惟にもまた悲觀的な特徴が現はれて來た。人間と現實界——これがこの時期におけるベスタロッチの最も大きなテーマである。如何にして人間がこの現實界において眞に「人間的」になり得るかの問題が彼の主なる關心事であつた。彼は咲き匂ふ人間の幸福を経験することが少なければ少ないほどそれだけ強く人間の本質の深い混亂を體驗した。そ

こで彼は人間的實存の極限の場合即ち墮落・病氣・迷妄などの場合を考へ始めた。一千七百八十二年の「瑞西週報」(Ejn Schweizer-Blatt) 64, 65 彼は次の如くに言つてゐる。「その最も深き歪曲の状態にある人間の像もまた善なるものであり、人間探究者にとつては稀なる高位にある人間の像と同様に價値あるものと考へられる。私は一般に翼や嘴なき人類を知ることが好む。然るに病める者とか弱き者は共に少なくともこれら二つのもを有つてゐる。癡狂院のなかにゐる不幸な者も私と同様に人間である。そして私にとつてはその香爐の煙に包まれた僧侶よりも多く私自身の反映である。」

この頃になつて人間の「根本衝動」の理解への努力即ち自己保存衝動を社會的並びに道德的秩序の根源と考へる思想が現はれて來てゐる。「立法と嬰兒殺しとについて」(Über Gesetzgebung und Kindermord) といふ著作のうちで彼はすべての惡と不幸とは「人間の心情の根本衝動の弛緩と抑制」としてか、或ひはその「放縱と頑度」として説明されると述べてゐる。人間の向上はこの二重の危険から豫防されることが必要である。人間が正しい軌道に乗ることを偶然に委ねてはならない。また純粹に自發的な有機的な成長に委ねてはならない。何故な

れば「リーン・ハルトとゲルトルート」(Leonhard und Gertrud)のうちで代官が述べるやうに「地上における人間の生活は過誤であり罪悪である」からである。「無法に破壊された自然とその破壊された存在とをもとどほりにすること」はもともと眞の能力發展によつて成し遂げられるのであるが、今や彼は特に「經濟的苦行」(ökonomische Asketik)の二重の目的に達し得ると信じた。經濟的なもの即ち財産とか職業とかいふ彼が既に「隱者の夕暮」において「個人的境遇」(Individuelle Lage)の概念のもとに意味したすべてのものは現實的な能力陶冶を可能ならしむる能力を有つてゐる。ただ「境遇の眞理」のみが「内的眞理」を實現することが出来る。この環境の經濟化を強調することにそのより狭き人間觀が對應した。即ち人間は根源的には善惡を超越した衝動力として見らるべき根本的な力によつて支配せられてゐる。しかしそれは自然的生活秩序の破壊によつて特に危険な消極的の力として現はれる。従つて今やペスタロツチの自然概念は積極的なものと消極的なものとの二つに分代する。言葉を換へて言へば「善き人間と悪しき人間との區別線はかなり明瞭にひかれる。」しかし彼は政治的・教育學的人間陶冶の課題を自然的能力を

發展させるところの市民的・職業的資存の確乎たる道に導くことにおいて見た。それは言ふ迄もなく「純粹な」人間の理想ではないが、しかしわれわれにとつて「人間の秩序化」の唯一可能な道である。當時の彼を支配したものはこのやうな思想であつた。これが彼の思想發展の第三段階である。

五

人間の現實のうちに深く沈潜して人間の本質の混亂を強く體驗したペスタロツチは最早や既成基督教の信仰のうちに靜かに安住してゐるわけにはゆかなかつた。「隱者の夕暮」を結ぶ最後の一節の如きは彼の自覺が基督教を救世主として仰ぐ基督教の信仰に全然背馳するものでないことを明らかに示してゐるが、人間の本質の混亂を體驗したのちのペスタロツチには既に「隱者の夕暮」のなかに感得されるが如き宗教的靜寂は見られない。今や彼には新しき使命意識が目覺め、彼の全思惟は一種の緊張を獲得した。彼はあらゆる欺瞞から自由になつて、人間・世界・生命をあるがままに見ようと欲する。斯くて彼は生きた存在並びに精神的な生活におけるすべての觀念的なものを避け、現實的生活境遇の中心概念としての所有權をば行爲並びに思惟における最も重要にして規定

的な要素と考へるに至つた。しかし人間のうちにはこの秩序に接合しない何ものかがある。即ち「義務と道德とに對する内面的感情」である。それは確かに人間の全自然的本質から生ずるが、しかし同時にまた盲目的衝動性に對立するものである。このより高き何ものかは人間の經濟的秩序附けによつてはどうすることも出来ないものである。最も確實な外的境遇のもとにおいてさへも尙ほ且つ人間は「眞に心を安らげる」ことは出来ないであらう。斯くては彼はその思想が單なる物質主義と誤解されることを恐れて、彼自身飛躍として示してゐる動きにおいて理念への還歸を遂行した。彼がその著「人類の發展における自然の過程についての余が探究」*Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschenschlechts*) にきつて述べるところがそれである。

ペスタロツチは「探究」のうちで彼の人間學的根柢概念を道德的乃至精神的なものの新しき認識と結合してゐる。彼によれば「人間は本能とは別に、また本能に對立して自分自身において熟慮と思想とを欲求せしめる力を持つてゐる。」本能と精神、感覺的行爲と思惟との對立を彼は鋭く把握した。精神の「動物的」出發點を没却す

ることは許されないが、しかし人間は靜かな成長によつてではなく、自分自身の分裂と争闘とによつてその完成に達する。人間はこの世界の事物をしてその「肉慾的な」意味においてではなく、「全くこの世界の向上に寄與する見地においてのみ」自分に働らきかけさせなくてはならない。これ彼が感性に對する理性の支配と名附けたところのものである。理性は外的境遇とは無關係に自律的なものとして認識されるところのものである。ここに彼の理想主義が動搖乃至危機の淨化を通り抜けて再び勝利を贏ち得たわけである。人間存在のこの理想的側面を彼は宗教とか道德性とか精神とかと呼んでゐる。勿論人はそれを自然的直接性において見ることは出来ない。ただ把握し得ない飛躍によつてそれが出来ることと出来ることとの差である。今や青年時代の無反省的な感激は現實の軀のもとに屈服した。そしてより高き存在に對する信仰は動搖の時期を通り抜けて新しい形態をとつて現れた。それと共にペスタロツチにおける人間學の問題は決定的な新時期に入つたのである。以上が彼の思想發展の第四段階である。

六

右に述べた道德性と愛とは何等直接的の關係を有たな

い。何故なれば「道徳性は全く個人的のものであつて、二人の間には成立しない」からである。従つて單に道徳性といふだけでは社會的行爲が何を基準にしてそれ自體を規定するかの問題は尙ほ不明である。確かに「探究」のうちにもペスタロツチが愛と現實社會への獻身とを通してより高き生命を把握しようと試みたことを示唆するところはあるが、併しこの課題を徹底的に追究するためには再度の経験が必要であつた。斯くて彼は一千七百九十九年シュタツツに孤兒院を創設した。この時から所謂方法の完成に至るまでの狹義の教育學的運動が始まるのである。従つて既に述べた如くペスタロツチの思想發展史を二分して前期を文化哲學の時期、後期を方法の時期と呼ぶことが適當である。ニーデラーはこの二つの時期の間に一つの思想的飛躍があると述べてゐるが、しかしペスタロツチがノイホーフの最初の事業以來つと彼の内部に確信的に發展し來つたところの根本理念をシュタツツにおいて實現しようと試みた限りにおいてそれは決して飛躍ではない。私の考ふところでは彼れの生涯の前期の主要課題であつた文化哲學と後期の中心問題である方法とは全然相異なる二つのものではなくて、前者は後者を貫きその本質を形成してゐる。しかし彼の思想

發展史における前期と後期とは外見的には余程趣きを異にしてゐることは争ふことが出来ない。即ち前期に於いて文化哲學者であつたペスタロツチは後期に人るや狹義の教育者乃至教育學者となつてゐる。今や彼は思索の世界に沈潜してその源泉に波むといふよりはむしろ源泉から流れ出た豊富な思想を教育的現實において實踐的に應用し、そして方法を完成することを根本課題と見做すに至つた。方法はブルクドルフ及びイヴェルダウンの時代に益々その完成に近づくのであるが、シュタツツの滞在に關する報告のうちには方法に對する關心は明らかに示されてゐる。これに關する詳細な敘述は言ふまでもなく一千八百一年に出た「ゲルトルートは如何にしてその子を教ふるか」(Wie Gertrud ihre Kinder lehrte?)である。就中この著作のうちに説かれてゐる直觀の原理はペスタロツチが全教育學において最も重要な位置を占めるものである。直觀が認識に對する意味と價值とを彼れの如く高く見積る者は恐らく認識論の全歴史を通じて多くはないであらう。ここに注意すべきは直觀の究極の目的は單に理論的な狹義の認識にあるのではなくて、それは畢竟道徳性の本質的前提でなければならぬといふことである。ペスタロツチの考へでは教授と教育とは分ける

ことが出来ない。教授は意向の醇化、善への意志の強化を目的としなければならぬ。そして内的の富を生産し全人間を改善し向上せしめつつ理解し、その生活と努力とに高い靈感を興へなければならぬ。若し教授がこれを果たさなければ、それは却つて利己性を助長するに役立つのみであらう。従つて直觀の究極的意義もまたそれが道徳性の本質的前提たることに存するのである。しかし彼れの眞意は周囲の人々によつて必ずしも正當には理解されなかつた。彼自身その理想に照らして觀て自らの經營するブルクドルフの學校が一面的な知的陶冶の場所と化してゐることを認めざるを得なかつた。理念の知識化のうちに横はれる危険を認識することによつて、彼の思想は更に一段の發展を余儀なくされるのであるが、それに至るまでの所謂方法メソッドそのものに對して最大の關心を示した時期を私は第五の段階と見做すのである。

七

一千八百四年ブルクドルフを去つた彼は一旦ミンネンヒェンブーフゼーに移つたが、やがて其處をも去つてイヴエルトンに赴き、其處に新しい學校を設立した。イヴエルトン學校の隆盛はペスタロッチの名を全歐に轟き渡らせるに到つたが、併しその學校の内的發展は極めて危険

な要素を含んでゐた。就中彼れの共力者たるニーデラーとシュニツトとの不和は益々露骨となり、この事件はやがてニーデラーとペスタロッチとの公然の敵對にまで導いた。この憎悪と分裂との體験においてペスタロッチは人間の内的價值即ち「人間性」は單に「氣高き直觀法」のみによつては實現され得ないことを認識するに至つた。陶冶された悟性乃至明晰なる頭腦も尙ほ根本的には彼が動物的のものと呼ぶところのものを超え得ない。「基礎陶冶の理念に關する見解と經驗」(Ansehen und Erfahrungen, die Idee der Elementarbildung betreffend)のうちで彼は「この世のすべての見解は愛が父母によつて目覺まされてゐない兒童にとつては單に動物的であるに過ぎない」と言つてゐる。更に一千八百九年の「新年講演」(Neujahrsrede)のうちでペスタロッチが述ぶるところによれば「愛はわれわれの本性を人間性にまで陶冶することの唯一永遠の基礎である。人は私が一面的な頭腦陶冶によつて人間自然の完成を求め、計算や算術の一面性によつてそれを求めるのだと信じたほどに過誤は大きく思違ひは測り知れざるものがあつた。併し決してさうではなく私は多面的な愛によつて人間自然の完成を求めるのである。私は決して數學への陶冶を求めるの

ではない。私は人間性にまでの陶冶を求めるのである。しかもこれはただ愛によつてのみ湧き出て来る。」

斯くの如き愛は動物的好意以上のものである。それは精神の明晰性を排除せず、却つてそれによつて貫徹されてゐるものでなければならぬ。それをペスタロツチは「見る愛」(Selbste Liebe)と呼んでゐる。この「見る愛」こそ「陶冶される」人間を眞に人間的たらしめることが出来るものである。

ペスタロツチの考へによれば道徳性は個人的のものである。この個人的道徳性は單なる衝動性からの分離を前提する。私と世界との衝動的關聯の斯かる止揚は精神のものである。だからこの精神的發展は人間の向上に對して大きな意味を有つてゐる。しかしこの衝動と精神との緊張は再び自己存在と共存在との對立の中に立つ。衝動的領域においてはそれは我慾と好意の對立である。併し精神的領域においてはそれは自己意識と愛との緊張である。

ペスタロツチによれば個人的道徳性は先づ第一に絶えず愛を以て全共存在に關係しない場合、第二に常に新しく生の深き源泉から興へられない場合には何等「人間的」價值を有しないことになる。生は最高の精神性に導く動

力である。母の衝動的愛はより高次の精神的愛の缺くべからざる前提である。「生と精神」(Leben und Geist)及び「自然と愛」(Natur und Liebe)と云ふ言葉はこの生命活動の必然的關聯を最もよく言ひ表はしてゐる。以上を要約して一言に愛の叡智とも言ひ得よう。ただ愛の全體行爲においてのみ人間は人間の理念を認めることが出来るといふのが晩年のペスタロツチを支配する中心思想であつた。これが最後の段階である。

八

右に述べた如くわれわれはペスタロツチの人間學的思想の發展過程を六段階に分けて考へることが出来るのであるが、併しそのうち方法メソッドはその本質において前期の文化哲學が教育學的形態をとつたものであり、また第一階段を形づくるところの青年時代の理想主義は人間學的思想の發展史の立場から觀るとき、未だ未熟の域を脱してゐない。従つて人間學的觀點から特に注目すべきものは殘る四段階であり、そしてその各々の時期の徵標としてわれわれは「自然」「經濟」「精神」及び「愛」の四つを擧げることが出来るであらう。併しここに注意すべきことはペスタロツチの人間學的思想の發展過程における變化は外面的には極めて強く見えるけれども、併し具體

的存在における理念の新しい實現の意圖はそれによつて恒常であるところにある。語を換へて言へばあらゆる時期の中心概念は變化せる形態をとりつ次の段階の思想のうちに浸潤して行つたをり、全體を貫く根本理念は畢竟人間の實現としてみることになる。

參考文獻

- (1) G. Keiser, Das Bild vom Menschen bei J. H. Pestalozzi. 1938. S. 91
- (2) Pestalozzis sämtliche Werke, hrg. v. L. W. Seyffarth, Liegnitz 1899-1902. Bd. I. s. 143-144 (Im folgenden zitiert mit S. I, 143-144)
- (3) Kritische Ausgabe von Pestalozzis sämtliche Werken, hrg. v. Buchenau, Spranger und Stuttbacher. Bd. I, s. 265 (Im folgenden zitiert mit Kr. I, 265)
- (4) Kr. I, 273
- (5) Kr. I, 273
- (6) Kr. I, 275
- (7) Kr. I, 273-274
- (8) F. Delikat, Johann Heinrich Pestalozzi. Zweite Aufl. 1928, s. 108
- (9) Kr. V, 120
- (10) Kr. IX, 21
- (11) Kr. II, 185

- (12) Kr. II, 417
- (13) F. Delikat, a. a. O. s. 108
- (14) S. VII, 463
- (15) S. VII, 463
- (16) S. IX, 258
- (17) S. X, 303